



TITLE:

<報告2>「伝統」を超えて --現代トルクメン女性と民族衣装コイネック

AUTHOR(S):

岡田, 晃枝

CITATION:

岡田, 晃枝. <報告2>「伝統」を超えて --現代トルクメン女性と民族衣装コイネック.
CIRAS discussion paper No.85: 社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族3: 装いと規範2 --更新される伝統とその継承 2019, 85: 23-33

ISSUE DATE:

2019-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_85_23

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

「伝統」を超えて

現代トルクメン女性と民族衣装コイネック

岡田 晃枝

東京大学大学院総合文化研究科

私はトルクメニスタンの女性の装いについてお話しします。トルクメニスタンは、初代大統領が個人崇拜の体制をつくりあげ、国中に大統領の金ぴかの銅像や肖像画が飾ってあるということが欧米や日本のメディアで紹介された結果、非常に強い権威主義体制の国であると認識されるようになりました。中学生、高校生、大学生の女性がみんな同じ制服を着ているために、そうした装いが国家統制を厳しくしている証左のようなかたちで取り上げられることが多くあります。そのあたりが実際にどうなのかについてお話ししたいと思います。ただし、トルクメニスタンでは、賀川さんの研究のように、研究者が研究のためのデータを取るために、一般の人々に対してインタビューすることは制限されています。ですから私が話せるのはあくまでも自分が接触した人々の服装と、私が聞いても差し支えない範囲での話、また日本に留学した人、あるいは海外で出会ったトルクメン人からの聞き取りが主になっています。その点をご了承ください。かなりバイアスがかかった話になるかもしれませんが、あまり地域差もない気がしますの

で、それほどひどく無意味な発表ではないと思っています。

まず、トルクメニスタンという国をご存じない方が多いと思いますので、簡単に紹介します。この場は女性の考え方や規範などについて追究する研究会だと思いますので、トルクメニスタンにおける女性の地位について少しお話しします。そして、メインとなる伝統的な衣装、制服として導入されているコイネックがどんなもので、実際にそれを女性たちがどのように着用しているか、それが国民を管理する抑圧的統制のための手段なのか、それとも女性たちにとっては別の側面があるのか、そのあたりについて私見になりますが話ししてまとめたいと思います。

1. トルクメニスタン概要

トルクメニスタンは中央アジアにあります。前回の研究会で帯谷知可先生がウズベキスタンのお話をしてくださいました。ウズベキスタンは、資料2-1の地図の濃い色で示した8か国の真ん中にあります。



資料2-1 中央アジア各国とトルクメニスタンの位置

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_Caucasus_and_Central_Asia_-_Political_Map.jpg から筆者作成

資料2-2 中央アジア諸国基本情報

国名	面積	人口	首都	大統領	民族構成	公用語 (国語)	一人当たり GDP
トルクメニスタン	49.1万km ²	580万	アシガバット	グルバングリュ・ベルディムハメドフ (2007～)	トルクメン人85%、ウズベク人5%、ロシア人4%、その他	トルクメン語	6,642.5ドル
ウズベキスタン共和国	44.9万km ²	3,190万	タシケント	シャフカット・ミルジヨエフ (2016～)	ウズベク人83.8%、タジク人4.8%、カザフ人2.5%、ロシア人2.3%、カラカルパック人2.2%、その他	ウズベク語	1,490.7ドル
カザフスタン共和国	272.4万km ²	1,820万	アスタナ	ヌルスルタン・ナザルバエフ (1991～)	カザフ人66.5%、ロシア人20.6%、ウズベク人3.1%、ウクライナ人1.6%、その他	ロシア語 (カザフ語)	8,840.9ドル (IMF, 2017)
キルギス共和国	19.9万km ²	600万	ビシュケク	ソオロンバイ・ジェエンベコフ (2017～)	キルギス人72.8%、ウズベク人14.5%、ロシア人6.2%、ドゥンガン人1.1%、その他	ロシア語 (キルギス語)	1,143.7ドル
タジキスタン共和国	14.3万km ²	890万	ドゥシャンベ	エマムアリ・ラフモン(1991～)	タジク人84.3%、ウズベク人12.2%、キルギス人0.8%、ロシア人0.5%、その他	タジク語	723.8ドル

データ出典……面積：各国政府／外務省Webサイト、人口：国連人口基金、民族：各国統計委員会（トルクメニスタンのみCIA The World Factbook）、GDP：IMF World Economic Outlook Database

カザフスタンの南がウズベキスタンです。トルクメニスタンはさらに南側にあります。カスピ海に面していて、アフガニスタンともかなり長く国境を接しています。また、トルクメニスタンの首都は山を越えるとすぐにイランに行ける地域にありますので、イランとのつながりもあります。

トルクメニスタンは、ウズベキスタンと同じようにソ連崩壊に伴って独立をしました。独立宣言は1991年10月です。実際にソ連が崩壊したのが12月31日なので、世界的に独立が認められたのは、1991年12月末です。天然ガスの埋蔵量が世界第4位という、すごくお金持ちに見える国です。実際のところ、トルクメニスタンの天然ガスに関しては、硫黄分が多くて、あまり高く売れません。脱硫装置を付けなくてはいけないわけです。脱硫装置で日本の商社、プラントメーカーがかなりテコ入れしていますが、掘ったら簡単に売れるという状況ではありません。埋蔵量も正確ではなく、実際のところ第6位だというデータもあります。

トルクメニスタンは永世中立国です。永世中立国というと、日本の若い人たちはスイスとオーストリアを頭に浮かべて、永世中立という概念と高度に発達した民主主義をつなげて考えることが多いですが、永世中立という国際法上のお約束事そのものは、民主主義とはそれほど関係がありません。民主主義であるほうが守りやすいことはあると思いますが、「よそが喧嘩をしているときには、そこに加わらない」、「自分の国は自分で守る」、「他国が喧嘩しそうときには、できるだけ喧嘩にならないように努力する」と

いったルールを守っていることが重要です。

トルクメニスタンは、1995年に国連で認められて永世中立国になっています。国連総会できちんと認められた永世中立国は、世界の中でトルクメニスタンただ一つです。1995年に認められたあとに履行の確認もされて、直近では2015年に履行確認がなされて、現在もそれが続いています。

人口は約580万人です。そのうち85パーセントがトルクメン人です。

中央アジア全体が似たような国だと思われるので、資料2-2に中央アジア5か国の情報をまとめました。トルクメニスタンは人口580万ですが、ウズベキスタンはおよそ5倍の人口があります。面積はトルクメニスタンのほうが大きいにもかかわらず、人口はウズベキスタンに集中しています。1人当たりGDPを見ると5か国であまりにも違いすぎるので驚かれると思いますが、ウズベキスタンが1,500ドルを切るなか、トルクメニスタンは7,000ドルに近い数字です。一時期は7,000ドルを超えていましたが、天然ガスの価格が下がって、現在では6,642.5ドルという数字になっており、現在は多少上向いています。中央アジアでは、カザフスタンに次いで豊かな国と言えます。

あとで権威主義体制の話もしますが、いわゆるパトロン・クライアント関係で言うと、クライアントが多いと言えます。現在は有料制に移行しつつありますが、これまで長い間、国民全員が、ガス、水道、電気などを無料で享受してきました。基本的な食料品もかなり安く価格統制されているので、どんなに貧し



資料2-3 キプチャク・モスク

筆者撮影

くても生きていけるということがこの国を見る上で重要なのだと思います。貧富の差があることはあるのですが、貧しい人が明日をも知れない生活をする必要はない、そんな国です。

次に宗教の話です。イスラーム教のスニ派の人たちが多くいます。ただし非常に世俗的な人々です。お酒も普通に売っています。トルコ系のスーパーには、お手洗いの近くにお祈りをする場所がありましたが、1日5回のお祈りを昼間にはしない人がほとんどではないでしょうか。ラマダンも部分的にしかしない人が多いです。集会の自由がありませんので、金曜日のモスクに人が集まることがあまり推奨されないという側面もあります。

資料2-3は、首都アシガバットのすぐ近くにあるキプチャク・モスクという有名かつ大きなモスクです。このモスクの塔の各部分や入り口には、いくつかの文字が刻まれています。クルアーンから取った文字だと思われるかもしれませんが、実は違って、初代ニヤゾフ大統領が書いた『ルーフナーマ』という書物の一節が散りばめられています。この書物をトルクメニスタン政府は「クルアーンに並ぶ書物だ」と出して出したので、国外のムスリム系団体からは強く批判されたこともあります。そういう独特の価値観を持った国だということができます。

国語はトルコ系のトルクメン語で、ロシア語も広く普及していますが、近年ではトルクメン語とロシア語のバイリンガルは減っています。一方で、英語を小さい頃から学び始める子どもが多いです。

先ほども言ったように、強い権威主義体制の国という評価が世界的になされています。Freedom Houseのレポートでは、最下位5、6か国の中に入れられて

いて、“Worst of the Worst”というタイトルが付けられている国ではあります。

2. トルクメニスタンにおける女性の地位

トルクメニスタンにおける女性の地位ですが、私がさまざまな大学で学生や研究者に会ったりするなかでは、彼らは「トルクメニスタンは女性をととても大事にしている国である」と口々に言います。トルクメニスタンに関してはジェンダーの問題は非常に小さいというのが彼らの言い分です。

確かに伝統的なトルクメン人社会に存在していた強い家父長制度は徐々に弱まってきていると言えます。女性が自分で仕事を始めたり、お父さんとお母さんが両方働いているのはソ連の時代でも当たり前のことでしたが、おじいさんがすべてをコントロールするといった強い封建的な制度は徐々に弱体化していて、首都ではそれはほぼないと現地の大学生たちには言われました。ただし、家事・育児は女性の仕事だという考え方は強固ですので、ソ連時代のソ連の女たちと同じく、女性の社会進出が奨励される一方で、家でも女性がほとんど働く。女性が24時間働いていて、男性よりもよほど働かなければいけないという負担が押し付けられている状況ではあります。

新しく誕生した国ですので、人口を増やしたいということもあって、多くの子どもを出産した女性には、国から褒賞が出ます。8人子どもを産んだら、産んだ女性は家がもらえます。現地に行ったときに、飾り付けられた家の前できれいな服を着た人がニコニコしている光景を何度か見たことがあります。「これはたくさん子どもを産んだ女性に対するプレゼントだよ」と説明を受けました。人口を増やすのに貢献した女性には、国からきちんと褒賞があるということです。

その一方で、国家公務員として重要な職で働く女性たち、アーティスト、実業家など、国家に貢献した女性への評価も高いです。資料2-4は国際女性デーのイベントの様子です。2018年に、3月8日の国際女性デーを挟んで、私が所属する東京大学の授業として学生を連れてトルクメニスタンに行きました。これは3月7日に行われた、子どもをたくさん産んだ女性を中心として、とくに貢献のあったお母さんたちを招いてのイベントです。外務省の偉い人たちがあいさつしていたので、政府が主催したものだ



資料2-4 国際女性デーでのイベント

筆者撮影

と思われますが、こうしたイベントが行われています。有名な歌手が歌を歌ったり、コメディアンが出てきてコントをして会場がドッと湧いたり、貢献した女性たちに政府が楽しい時間をプレゼントするということがされていました。

資料2-5の大きなスクリーンに映っているのはベルディムハメドフ現大統領です。大統領が歌っている映像が流れて、それに合わせてみんなが踊るというシーンが見られる興味深いイベントでしたが、これは大統領が主催した国際女性デーのパーティーで、3月8日に行われたものです。この政府主催のパーティーでは、閣僚や議会の議員、国家公務員として省庁で働く人たち、各国の大使夫人、女優、歌手などの女性たちが招待されて集まっていました。

トルクメニスタン政府のご厚意で、私たち（ただし女性のみ）もそこに参加させていただきました。学生たちは動画などで見たことのある女優さんや歌手の人がいると大喜びしていました。

子どもをたくさん産むという家庭内で活躍をした人と、家庭の外で活躍した人との両方がきちんと評価されているところに、トルクメニスタンの女性の地位を考える興味深いポイントがあるのではないかと思います。

女性の実業家も増えています。私も何人かに会って、インタビューはできませんから、たまたま親しかった方々にいろいろ話を聞いてきました。また、社会起業家としてリーダーシップを果たしている女性も増えています。活動に定評のある人たちもいます。

女性議員の数は4分の1を超えています。日本の国会の女性議員が13.7パーセントであることに比べると、議会に占める女性の割合は二倍近いです。現



資料2-5 国際女性デーのパーティー

筆者撮影

在の国会の議長も女性です。閣僚にも女性は何人も入っています。

トルクメニスタンの大学は、一部の私立学校を除いて、学校はほぼすべて無料で教育が行われます。大学に至っては奨学金をもらえますので、大学に通えば給料がもらえるという状況です。そのなかで、3年ほど前に、授業料を学生が支払うタイプの国立大学が初めてできました。そこでは教育をすべて英語で行っています。「国際人文発展大学」という少し変わった名前ですが、経済学や国際関係学、文化、地域研究も学ぶような、人文・社会科学系の学問をメインとする大学です。英語で教育をしていますし、大統領の肝煎りで設立されたので、入学がものすごく難しいところですが、そこに占める女子学生の割合は60パーセント、半分以上が女子学生なのだそうです。

また1年半前、筑波大学がかなり協力して、工科大学を現地につくりました。割合を正確には聞いていないので漠然とした話ですが、関係者によると、理系の大学なので男子の入学者の方が圧倒的に多いだろうと思ったら、そこも英語で教育をするということで、ふたを開けてみたら関係者の予想を裏切るほど女性の入学者が多かったということです。

猫も杓子も大学に行くような国であれば、それもありえるという気がします。しかし、中等教育まではほぼ100パーセントが受けますが、高等教育に関しては、トルクメニスタンでは8パーセントを切る進学率しかありません。ごく一部の人たちが大学に行くわけです。その状況で文系のトップの大学で半分以上が女子学生というのは、かなり興味深いケースではないかと思います。その大学を卒業した女性たちは、もちろん社会で働く人もいますし、そのまま海



資料2-6 伝統的な衣装

Lachyn (Official Inflight Magazine of Turkmenistan Airlines) Issue 16, 2017.5, p.14 から引用



資料2-7 現代のコイネック (中学生)

筆者撮影



資料2-8 現代のコイネック (大学生)

筆者撮影

外に留学する人もいます。

3. トルクメニスタンの女性の民族衣装

続いて女性の民族衣装の話です。今回の報告で中心とするのは、コイネックというものです。説明書きではチュニックと書かれていますが、最近のトルクメン人の女の子たちは、基本的に「トルクメンのドレス」と言っています。

丈が長くて、踝あるいはそれ以上の丈があります。ケテニと呼ばれるシルク生地で作られているものが多いですが、近年では木綿のもの、ポリエステルが入ったペロアの生地も見られます。その下にはびったりとしたパンツを履きます。賀川さんがお話しされていたドレスの下に着用するパンツとは、かなり形が違うと思います。

遊牧民族で、もともと馬に乗る人たちでしたので、股の部分が広がっています。裾は狭くなっていて、びったり足に合うようになっています。これも遊牧民族に特有で、虫が入ってこないなど自衛のためにこのようなスタイルになっています。これが基本的な形ですが、最近の女の子たちはこのパンツではなく、丈の長いキュロット型のペチコートを履いている人が多いようです。そのような便利なものも出てきました。その上にはチャビットという上着を着て、

タヒヤという丸い帽子をかぶります。

古来の衣装は資料2-6のようなもので、19世紀ぐらいまでの女性たちは、何かイベントがあるときは、このような衣装を着ていました。この写真の衣装は花嫁用のものなので、アクセサリがたくさんついてきらびやかです。この上にかぶる衣被きぬかづきのようなものは、女性の地位、子どもを産んだのか産んでいないのか、どれぐらいの年齢なのかなどによって色が違ったり、トルクメンの各民族によっても好まれる色があったようです。

アクセサリは各民族の代表的な文様が施されています。アクセサリの一部は、日本のポーラ研究所が1993年に入国して買ってきて所蔵していますので、ポーラ美術館でたまに展示があります。これが古いタイプのトルクメン人の衣装、ハレの日に着るための衣装だと思ってください。

実際に現在着られているコイネックは、資料2-7のような感じです。これは中学生の女の子たちです。資料2-8が大学生の衣装ですが、最近の人たちはこのような服を着ています。

資料2-9は、コイネックを仕立てるお店です。壁の上のほうに掛かっているのが生地です。生地もさまざまな色がありますし、いろいろな布地のタイプがあります。奥のほうに掛かっている栓抜きのような形のものが、コイネックの襟の部分です。襟の部



資料2-9 コイネック制作を請け負う店舗

筆者撮影

分、刺繍の部分だけが独立して売られていて、自分で生地に合わせて好きな襟の形、好きな刺繍を選んで縫い付けてもらいます。その刺繍に合わせて胸の開き具合も調整します。基本的に丸襟ですが、浅い襟もあったり、深い襟もあったりします。刺繍の部分が特徴を出しやすい部分ですので、みんなかなり慎重に選びます。

お店でミシンをかけている人たちがいますが、この人たちは刺繍をしながら襟の部分を作っています。私が作ったコイネックの生地は、国際女性デーの大統領主催のパーティーのときのおみやげ一式に入っていたので値段がわかりませんが、襟は日本円に換算して1,000~1,500円ぐらいのものが多かったと思います。

どのように作るかという点、既製品もありますが、ほとんどの女性は生地をまず選んで、それに合わせて襟周りの刺繍を選びます。それを合わせて縫製を請け負う業者に持って行って、自分の体に合わせて採寸してもらいます。襟ぐりをどうするか、袖の部分を膨らませるのか、ぴったりにするのか、袖丈をどうするのか、ウエストをシェイプするのか、ゆったりにするのか、どんなヒールの靴を履いて、どれぐらいの丈にするのか。そのようなことを個別に打ち合わせをして作ってもらいます。そのコイネックに合わせて靴を決めて、そのヒールの高さを加味したドレス丈で注文するという点もポイントです。

仕立て代は3,000~5,000円ぐらいです。ただし、為替レートが実勢を必ずしも反映しないかたちでコントロールされていると言われておりまして、おそらく実勢価格としてはその3分の1くらいではないかと思われます。そうすると襟が相当高いという印象

がありますが、それぐらいの値段で女の子たちはコイネックを手に入れます。

もちろん自宅にミシンがあって、自宅で縫う人たちも若干います。JUKI製のミシンがすごく人気で、日本企業のなかで意外なことにトヨタに次いでJUKIが有名です。「襟の刺繍も自分で行ける」と言っていて、実際に向こうの学生さんたちが、「こんなふうに刺繍するんだよ」と刺繍のやり方を見せてくれました。趣味と実益を兼ねて自分で刺繍する女性もいます。

自分の体に合わせて、自分の好みに合わせて作ってもらうことができるので、デザインに関しては、決まった形も、「こうでなければいけない」というものがあるわけではなく、それは時代によって、人々の好みによってかなり変化します。このあたりがポイントではないかと思います。これについてはまたあとでお話しします。

4. 制服としてのコイネック

次に、コイネックがなぜ制服になったか、どのように制服になったか、どのように着用されているかについて、お話ししたいと思います。初等・中等教育に関していうと、子どもたちのほとんどが中等教育までは受ける国です。ですから、まずは初等・中等教育にコイネックの制服が入ります。

独立後あまり時間を置かずに、初等・中等教育における制服にコイネックが指定されました。それは緑色のドレスです。トルクメニスタンの国旗が緑色ですが、そのナショナル・カラーの緑を使ったものです(資料2-10)。少し光沢のある生地です。この写真では夏まだ暑い時期だったので1枚で着ていますが、冬になるとその上に丈の長い上着(チャビット)を羽織ります。帽子は、先ほど見せたのと同じものをかぶっているのがわかると思います。パキスタンの例とはまったく違って、子どもたちは太陽に存分に顔をさらしています。もちろん日焼けを嫌って帽子をかぶっている子はいますが、顔を隠すという文化は、トルクメニスタンにはほとんどありません。

資料2-11の子たちはみんな緑の生地のドレスを着ていますが、襟の部分の刺繍がいろいろ違うのがおわかりになるでしょうか。伝統的な模様として似たようなものもありますが、違う襟のものを選んでいきます。右下の子は前立ての部分が短いですが、この



資料2-10 コイネックを制服として着る中学生

筆者撮影

ようにいろいろなデザインの襟ぐりをしています。

一方、大学でのコイネックは、それよりもかなり遅い時期に導入されました。初代大統領が2006年12月に亡くなって、その後選挙を行って2007年2月から現在の大統領が執務をしています。現在の大統領になってから、大学生もコイネックを着用するように義務付けられました。

当時は学校ごとに色が違って、青に白いチョッキを着ている学生、黄色い服を着ている学生など、学校ごとにスクールカラーがあって色とりどりでした。5年ぐらい前になって、すべての大学で赤色を着用させるようにという指令が、政府から出されました。赤もトルクメニスタンのナショナルカラーで、絨毯の色です。

現在は、緑の制服を着ているのが小中高生、赤の制服を着ているのは大学生だと、みんな認識するようになっています。ただし、一般の人たちも赤色の服をよく着ますので、赤を着ているからみんな大学生というわけではありませんが、若い子が赤いコイネックを着ていれば大学生だろうと目星を付けても、あまり間違いではないかもしれません。

細かい部分に関しては、大学ごとに指定要素を加えることができるそうです。私が行ったいくつかの大学では、みんな似たような生地を着ていました。色味もほとんど同じだったと思います。学校ごとに少し暗い赤、明るい赤もありましたが、あまり変わりはないと思います。ほとんどの大学で、ペロア地の生地を使っていたように記憶しています。

学生だけではなく、実は学校で働く教職員もコイ

ネックを着用することになっています。「これを着なくちゃいけないのよ」と女性の先生たちが言っていました。コイネックを着ることが面倒くさいわけではないようです。いろいろな服から選ぶのではなく、コイネックのシリーズから服を選ばなければならないのが少し不自由だと言っている人はいました。

テレビ局のキャスターを含む一部の公務員も、着用を義務付けられています。教育省などは、コイネックを着ていかなければいけないそうです。一方で外務省の人たちは、仕事柄、外国の要人に会うこともありますし、必ずしもコイネックでなければいけないわけではないと言っていました。このあたりは細かいルールがあるようですが、外から見える明文化された資料が手に入らないので話を聞いただけですが、職場によってはコイネックを着ていかなければいけないところもあり、そういう規定がないところもあるようです。ですから、国全体、どの職業の人も、どの女性の人も、全員がこの服を着なければいけないわけではありません。典型的な例では、国連のローカルスタッフは誰もコイネックを着ておらず、全員、普通のヨーロッパでよく見られるタイプの服装をしていました。

現地の大学生が、トルクメニスタンの文化について語ってくれましたが、日本の女の子たちが着物について語るときに、まったくわからないところがたくさんあるのと同じように、彼女たちも必ずしもすべてを知っているわけではないというところもあります。教室の中の風景は、資料2-11のような感じです。黒い服を着ているのは私が連れていった学生



資料2-11 大学の教室での様子
筆者撮影

です。女の子も男の子も同じ教室で一緒に学び、議論をするという学校です。

結婚していない学生さんは、タヒヤという帽子をかぶります。結婚した女性は、資料2-4のように、みんなスカーフをかぶることになります。スカーフの巻き方がとても特徴的です。大判のスカーフを3枚ぐらい使って、このような四角いかっちりしたシルエットを作るそうです。しかし最近の人たちはそれほど上手にかぶれないので、バケツのような型があって、それをかぶって上からスカーフを巻くという便利グッズも現在は出ています。

結婚している人は、学生であってもスカーフを巻いています。いくつかの大学では在学中に結婚した子たちがいて、その子たちも同じ教室にいますが、スカーフを巻いて授業を受けていました。長老に近いおばあちゃんになってくると、このような巻き方ではなく、頭に沿った巻き方で、なおかつ長く裾まで垂らす、そんな巻き方になります。かつては民族によって巻き方が違ったり、スカーフの色が違っていたと言われていましたが、現在は民族による統制はないそうで、自分に似合う色を選んでいると言っていました。

5. 制服としてのコイネックの背景

先ほど、コイネックを制服とするのは国民を統制するためではないかという議論が時々あるというお話をしましたが、その背景として、独立後の国民統合という急務があったことが大きいです。同じ中央アジアのタジキスタンでは、1992年から内戦が起っていました。高い山に隔てられた各地域でそれぞれコミュニティが発展したタジキスタンでは、ソ連時代に優遇されたコミュニティと冷遇されたコミュニ

ティがあって、新しい時代になったときに、いったい誰が政権を動かすのが原因になって内戦が起っていました。つまり地縁のグループで対立が起った内戦です。またカスピ海の対岸では、アゼルバイジャンとアルメニアが、ナゴルノ・カラバフをめぐる大きな殺し合いをしています。さらにロシアもチェチェン問題を抱えていました。

そうしたなかで、国民が分断されるような制度ではなく、国民全員がトルクメン人として国を盛り立てていけるようなシステムはどんなものかを考えて、民族ごとに分断されたコミュニティではなく、トルクメン人全体を指すような文化をつくり上げるということがなされました。

南にはアフガニスタンがありますし、トルクメニスタンとしては、統一的なトルクメン文化を創出して国民統合を急ぎ、分裂しない国をつくりたいという状況でしたので、それが一番大きな背景で、国民全体を包括するような文化政策の一つとして制服を導入したことができます。

6. 強制か選択か

制服がコイネックとして導入されたことに対して、「自由を奪う」とか「高い生地なので貧しい国民に経済的負担を強いる」として、いくつかの人権系のメディアや女性運動の欧米のメディアが批判している記事を見たことがあります。しかし実際問題として、登下校と学校にいる間だけの着用ですし、それ以外の部分では、コイネックを着ようが、別の服を着ようがかまいません。ものすごく体を露出していたら「あの子は……」と言われますが、どのような服を着ようがそれほど問題が起ることはありません。

大学の制服指定が行われたのが2000年代後半としましたが、それまで女の子たちは、大学には自由に服装を選んで着て行っていました。みんなが洋装だったのに政府がコイネックを強制したのかというとそうではなくて、洋装している子たちと、コイネックを着ている子たちが普通に混在していました。コイネックを日常着としている女性も、それなりの数がいたということです。コイネックだと毎日違う服を着ていく必要はありませんが、洋装の場合は毎日同じ服を着ていくと目立つので服をたくさん買わなくてはいけないために、コイネックのほうがお金がかからないと言う人たちもいました。特定の子たち



資料2-12 ピクニックでの服装

筆者撮影



資料2-13 夜の外出時の服装

筆者撮影



資料2-14 ウェディングドレス

筆者撮影

がコイネックを着て、特定の子たちが洋装をしていたわけではなく、同じ人が「今日はこっちにしよう」ということで、洋装もコイネックも併用する学生がかなりたくさんいたそうです。

現地に滞在していたときに、うちの学生とトルクメンの大学生たちが一緒にピクニックに行きました(資料2-12)。左端は日本人の学生で、その隣に4人がトルクメンの女の子たちが並んでいます。そのうち3人はコイネックを着ていますが、1人はブラウスにジーンズという格好です。このように学校から離れたところで何かをする際には自由に服装を選んで、コイネックを着なければ着てくるし、そうでなければ軽い服装をします。資料2-13の左側は日本人の学生で、右側がトルクメン人の女の子です。昼間はコイネックを着ていますが、「夜、一緒に遊びに行こう」と言うと、出てくるときにはこういう洋装を着てきました。

賀川さんの報告で、誰も買わないパキスタンのショッピングモールの素敵なドレスがありました、

トルクメニスタンの場合は、ウェディングドレスとして資料2-14のようなものを着る人たちもいます。

コイネックであることと、色を統一したことによって民族ごとの特徴が薄れたことは大きかったのではないかと考えます。それによって民族を超えたスタイルが誕生しています。民族ごとの特徴がどんどんなくなってきて、みんなが同じような流行を追うようになってきました。政府から強制されたというよりも、若い女性たちが、政策のなかで一種の自分たちのスタイルを生み出すことにつながっています。

最初は伝統的なゆったりとしたスタイルでしたが、2000年前後は日本で1990年代に流行したボディコンのようなピタピタなコイネックを着て、みんな学校に行っていたそうです。現在は、再びゆったりとしたスタイルに移りつつあります。それを牽引しているのは政府ではなく、ファッションリーダーとなるおしゃれな若い女の子たちです。さらにその人たちにはフォロワーがついていて、特にインスタグラムでの情報発信や収集が積極的に行われています。



資料2-15 コイネックの新たなスタイルの模索と展開
SAHRA SAHINファッション・ショーの動画(https://www.youtube.com/watch?time_continue=10&v=-B4YMF6GH6IA) から引用

資料2-15は有名なファッションデザイナーのショーの様子です。若い女の子が自分のブランドを立ち上げて活躍しています。見ていただくとわかるように、コイネックは前立ての部分に刺繍が入っている長いドレスですが、必ずしもそれにとらわれずに、長いドレスで、さまざまな形のものが出てくると言えると思います。ただし、丈が長いという点は共通しています。

伝統への回帰でもなく、古臭いしきたりを政府が押し付けたわけでもなく、伝統を活かした新しい女性のスタイルの模索がいま行われています。それを活かした事業の創出が、若い女の子たちを積極的に動かしていると言うことができます。ソ連時代にソ連タイプの洋装が入ってきて、民族服がどんどん廃れていきましたが、民族の服装が選択肢の一つとして残ったという見方もできると思います。さらに、新しい情報収集や発信の手段を若い女性たちが開拓することによって、コイネックは社会を刺激のある方向に動かしていくきっかけにもなっています。

■ 質疑応答

和崎聖日(司会) なかなか聞くことができない現代トルクメニスタンの、とりわけコイネックに注目した貴重なご報告をありがとうございます。事実関係などについて、何か質問がありましたらいかがでしょうか。

森理恵 男子は制服はありますか。

岡田晃枝 これは中央アジアでほとんど共通ですが、男子は黒いジャケットに黒い細いネクタイ、黒いパンツといういわゆるスーツ姿です。それが制服というか標準服のような扱いで、それ以外のものを着てくる子はいないです。それにこの帽子をかぶってきます。

森 中学校などもそうですか。

岡田 はい。

森 小学校は……。

岡田 小学生もみんなそんな感じです。

帯谷知可 小学生もネクタイを締めるんですか。

岡田 ネクタイは中学生からだと思います。ウズベキスタンはどうですか。

帯谷 制服というより、ゆるやかなルールとして、無地のシャツにズボンですね——中学生にネクタイはどうですかね……。大学生はネクタイが必要なんですよね。

岡田 大学生はしていますね。高校生はトルクメニスタンもしているはずですが、小学生はしていないかもしれません。

帯谷 男子は黒っぽいズボンに無地のシャツが標準ですね。

岡田 カッターシャツですね。

帯谷 みなさんお店で買うんですよね。

森 既製服で、洋服なんですよ。民族的な要素はないんですね。

岡田 洋服です。民族服ではありません。

帯谷 以前にインターネットで、トルクメニスタン国民はすべて、ロシア人などであってもコイネックを着なくてはいけないと読んだことがあるのですが、そうなのでしょう。

岡田 制服とか、職場で決まっている場合には着ますが、普通に日常生活をする場面では、彼らは自分で好きな服を選んでいきますので、それが日常のすべてを縛っているわけでは、まったくないです。学校に行くには校則を守らなければいけません。それは留学

生であってもそうです。日本人の先生たちも向こうにいますが、日本人の先生たちもコイネックを作って学校に行っています。

後藤絵美 連れていかれた日本人の学生さんたちは、なぜリクルートスーツみたいな恰好をしているのでしょうか。何かむこうに行くための規範があったのかと思ったのですが、どうですか。(笑)

岡田晃枝 学校の写真を見ていただくとわかるように、学生たちがみんな民族服などのきちんとした服を着ているのに、日本人の子がTシャツや短パンで行くと浮いてしまうので、「表敬訪問用にスーツを持ってきたさい」と言ったら、彼らは「みんなに合わせる」と言って、それを着て学校に行きました。国際女性デーの大統領主催パーティーについては、招待されるとわかったのは現地に着いてからでした。そのため、日本からパーティー用の服を持参するよという指示を学生たちにはしておらず、パーティーにはさすがにカジュアルな服では行けませんので、みんなスーツで行ってしまいました。(笑)